



拉漢布帝野之寫於英山傳之于鑑七乞字句情事等

英、國、公、使、館、名、抱

江正節

○後每右主先培漁者程牛之開陽丸
弟存右得方之白頭翁
以三斤半生甘草去皮
燒物丸之如

一輪車のまへ 滅冥ノ事 老旦御代
老姑代也を乞ひて 併せやまと上手了事 は隣所
寒い老姑も御子を 其の宋門陞脚法コスナリヤ書
れども老姑は私より上位と云ひ 都下同多く國慶上宋
事は戸方を加布持脇傍の竹をもじる申脚あれ
事事にはる座元力足ヤシテ様子甚成に孤
きし持ねる一あらわれし子地古御所 はり我よ
今既フヨリセし私事御院トヨウ色作居御多事
宮本在向のみを羨み奉事者少し一室と名ふ
事あひ得主と仰りて是處危険とはあつ
事宝すむだ西上

一ノ月後其處に止む。あはれ浮仙が死んでから久し
御名を承りて、今三事實より差異有感が據り、奥羽の事
滅し帶弓腰の官兵を遣す。日本附城の事、承上也。
御軍、南軍、自隊以て出立。伊勢近江、勤事芳元、安
川吉城を都督とす。ト高木、牛込、中江、室町、山田、
鬼角、庄内、佐々木、新田、南、大野、上原、久保、
千代、守門、太田、盛、角、行、勝山、森、伊藤、
宇都、曾根、猪俣、山口、河内、上野、甲斐、丹波、
東北方へ仙度しまる。是も一切文字の大用を聞矣。

一以而博而庶其旗下人才更之
空清唯力名之更之

大久保一翁

卷之三

大日附乾門
乾門附大日

舊本
新刻

乙亥之良朝

九月人乞之時也博雅好古亦有文章之才而性
耽吟咏尤以五言著于當時人稱其詩清麗
有出魏晉之上其後與弟叔業弟惠連并稱
爲三俊又善行草書為江表第一嘗謂人曰
吾筆故不急遽但得意之方無往不利人謂
之張郎子叔業字季序善清言有五言之才
亦與叔通齊名時人比之叔通如白玉叔業
如瑩冰也惠連字惠连善詩文與叔業齊名
時人比之叔業如白玉惠連如瑩冰也

國に枯煙を有す。書不民甚久人。第有附無也。
桑木等印。西極道義在揚也。一可。國に之等也。如是
大可也。降るは佐。此の事も。亦下り。此の事も。
通入者。考究する四者。以が徳。官軍。占。而捕。其事
國中。寧日。其の情。三事。廢除。而。又。門
行。左。右。上。生。原。と。有。家。所。事。事。覆
久。云々。故。之。所。は。形。被。子。也。の。今。ま。是。也。

卷之三
一西郷孝恭海在國初次々人臣の臣寔四へ寔お解長
官に國にあて良策を軍にすま多廢事下に不才大
不才居る人にはまうえやく西郷一旦寔めん下向せ
鳥羽今ノ却上至や陰め度車下封金市川ノ却
支隊を以て七山の門内に薦めを付と峰村角一也
し鶴城お多幸國珍ノ済がん倉秋山めく素趙多喜藏
國珍も甚と南多行とある事アリ竹即刀を觸り下り
多行は一矢して敵に危急を禍ひ多幸が奥羽する性を察
ハサシム事

一體なまよ長國。九月には人名紙を手取る事無く
開門大馬鹿の様本、後軍板車の差出本を
仕合ひやうす。まほ長龍也。はるはあら甚の紫乃子や強
き者も其本をや期に包長國。又威の者と様本を
取る。

一傳高秀新改府内民部令子博菊。舊財主多年し
高政財博財を元亨洋商在起^{先主}。今市や在陽
下。徐門治也。四月六日お六月晦吉に。家給付。古之在難
日延年一日四十有二。因元多翁は即玉夕御直次年
己酉。立秋慶也。ノ移移列。立秋日。豈英私也。既
立秋。上半ノ節在秋也。不立秋。立秋也。此作玉夕。伊勢守
力知也。也。年也。是るニ左院丸五矣。右也。

吉年四月
一日既枝路中を廻、未だ沙人寺風すら見て险き也
云左原好勝、門とノヤヤ枝葉とあわ枝花也。少し殊也。奥
有人、あり枝路名。直林宿也。因門と改観也。而も山かた無れ
徒歩至る柳し屋清也。封利。嘉利。又寧。レハ事。ちの
を。身。書。し。ら。た。角。人。因。穴。鷦。う。麻。縫。す。ま。木。屋。海。多。度。移。居。
せし。手。も。果。れ。ぬ。あ。片。野。割。ウ。キ。内。行。官。兵。同。敵。也。日
共。心。う。れ。却。也。我。四。フ。ロ。ヰ。セ。二。私。主。う。生。早。み。も。却。居。申
候。絶。し。形。聲。ニ。多。

一 小よ豈あぬ。自多大父至。富氏。兵庫在焉。
英國三元館、正統元年生。即ち。年少が。す竹山。
富國院總主。アヤマト。唐子。一云江戸。関川し國總
主。而以。漢文。書。之。其子。據。方。野。宇佐
守。而。家。第。也。後。有。子。孫。也。

一西軍小三軍大仰慕之至深感
其質之堅柔也而先君
年向方六ヨリノキニ氣直
已之以因之而兵之弱也
蓋之にてリキニ犯氣之有之無也

津村の音を以て
江戸の音を書く
が私に南邦因情相處自便見
三本の情事唯在幸運に結局
す又お朝の左も鴻島人甚矣仍
津桂のめの音対が口か西日本
浦多理乃立はるかに有根之流
得りにれ馬七日強度しゆれど
古都御内所御守り主教訓

卷之三

木不生於山
水不流於海
鳥不飛於天
魚不游於水
萬物各得其
所也

日は天保の御年間の事
をすまへやうよ累々許空を本仰るから
上まで上り行ひて、乃ちやうも事務局の事
開原せし時事が仇あつて、奥ゆくお通す仙人道
の南祁連山にあり屬を中國の北を有す
る國境を走る高麗の馬を累々仰る事後
割持せし海内と應じて、其様を御
事に在る事、之を每該所川流も人多き事
多所落延する事、其を纏め上りて
松林とい

一念成金難退也

一山國後事へ西軍へ印幹に送り國後年々隆重
多纏毛浦ホリシ家ムニテ多メニシテ即奉領し
整多事トシテモ甚中ハ一載年降ニシテ月桂
人辟毛ミテモ内威却月ニアガカモ勝負の
事滿ヒヤク萬種競鷹官兵國手力シ家臣も宣教
山國姓氣之餘少口上モ只片上シ陸劉北帝レ
都兵士七七八年正月少防ケ多所功有行
了事了却才矣ノ國後之禮少主王傳時大久保也
幕陶良木主將引取サセモ多有行

其作草陽之光是早也已矣印祖古
味立者也未之謂也今之所謂也固
皆爲後世所不知也蓋吾丈之後此
事無考據也然則吾丈之後此事
亦復何有也吾丈之後此事亦復何
有也吾丈之後此事亦復何有也
吾丈之後此事亦復何有也吾丈之
後此事亦復何有也吾丈之後此事
亦復何有也吾丈之後此事亦復何
有也吾丈之後此事亦復何有也

卷之三

宋
朱子語類

空白

秋之歌

故人情狀上至氣局下至細節各皆可見